岡

本

潤

**岡本　潤**（おかもと　じゅん）　一九〇一年埼玉県本庄に生まれて、父と別れた母と京都に移り、平安中学から東洋大学に入る。若くアナキズムに注目して北風会の集会に出、社会主義同盟に加わり、一九二一年佐野袈裟美主宰の雑誌『熱風』同人となる。萩原恭次郎、壺井繁治らと『赤と黒』を創刊したのは一九二三年一月、以後前衛詩人として知られ、つづいて『ダムダム』『文芸解放』同人として反ボルの急先鋒、さらに宮嶋資夫らの『矛盾』同人、一九三二年秋山清と『解放文化』を出してアナキスト文化団体の組織に尽力し、翌年全国的な解放文化連盟の結成を見た。戦時下に中野秀人、花田清輝らと文化再出発の会をつくり『文化組織』刊行に協力した。『夜から朝へ』『罰当りは生きている』（戦前）、『夜の機関車』（戦中）、『襤褸の旗』『橋』『噛う死者』（戦後）等の詩集の他に『現代詩への招待』、自叙伝『詩人の運命』がある。代表的なアナキスト詩人として知られていたが、戦後一九四七年共産党に入った。

## 市街・1

せりあがってくる舗道
飾窓を伸縮する商店街
錯綜し疾駆する電線
乗合自動車ははすかいに風を切ってゆく
ドッ　ドッ　ドッ　ドッ

口をあけたまま揺れている女車掌
手をあげたままずりさがってゆく交通巡査
コンクリートの截断面から砲弾雲がわきあがっている
≪脳壁をかすって消える動乱の幻（イメージ）……≫
おれは轟然たる発射をおもう
今や　おれの可能は　せめてこのガラクタの市街に唾を吐きかける
　ことだ。

## 市街・2

氾濫する電飾
なだれるプロムナード
ごうごうたる潮騒のなかで　陥没した饑餓の賑が獲物をさがしてう
　ろついていた

遠い空でバラバラの星くずが光を失っていた
饑餓の賑はむなしく彷徨した
電柱へでもかけのぼりたい焦燥と
真夏の氷山のごとく流れ流れるもの

十字街の空高く
ビルディングの大時計が悠然と十時を鳴らした



## 男らしくない話

お前が病気をするのは
おれが困るということだ
お前が蒼い顔をして苦しむのは
おれがいたたまれなくイライラすることだ
病気をすれば「死ね！」と怒鳴る
おれは一体誰に怒鳴ってるのだ
惚れたハレタの問題ぢゃないんだ
妻というものは何故病をするか
子供というものは何故泣きわめくか
父親というものは何故怒鳴るか
人情とはどんなものか
貧乏とはどんなものか
いや止そう、男らしくない話は

## 汽笛と死骸

### 1

夜業の汽笛をあたまの上で聞きながら
彼はローラーを握って死んだ
彼は屍骸になった
彼の屍骸は黒い布で被われた

だれも動かなかった
だれも叫ばなかった
どいつもこいつも死仮面(デスマスク)のように黙りかえっていた
どいつもこいつも油の切れた機械だった
みんなひとところにかたまって



屍骸になった彼といっしょに
ながいながい夜業の汽笛を聞いていた

### 2

一人がぼっくりあたまをもちあげた
——おれは生きてるぞ！
一人が叫んだ
——おれも生きてるぞ！
——おれも！
——おれも！
みんないっせいに手をあげて叫んだ
——止めろ！　おれたちの手で
——あの呪わしい夜の気笛を！
屍骸になった彼はよく知っていた

ながい汽笛のついに止まる時を
今までにない夜明けのくる時を
みんなが声をそろえて叫ぶ時を
——鳴らせ！　おれたちの手で
——今までにない夜明けを告げる汽笛を！



## マフノとその一党

おれ達は七人
おれ達は少数団
おれ達はウクライナの土百姓だ
おれ達の手は石のように握り合わされ
おれ達の結束は鋼鉄のように固まった

吹きさらす寒風
重く垂れた鉛色の天空
果てしもなく凍りついた曠原
雪に包まれた原始の森林
おれ達は潜行し
おれ達は濶歩する

来れ
自由友！
自主の兄弟！
来たれ
君達の勇気と大胆とを糧(かて)として
今こそおれ達の鋤鍬(すきくわ)はおれ達の武器となった
おれ達の仕事はおれ達の手で
おれ達の闘いはおれ達の肉弾で
土民の血に染められた黒旗をかざして
マフノとその一党は決然と起った

急激に　加速度に
おれ達の仲間は増加する
雪を蹴り　森を潜り　沼地を越え



暴風のごとくおれ達の同志は馳せ集まった
勇気と大胆とは白色恐怖(ホワイトテラー)を圧殺した
焚火(たきび)も凍る厳寒の夜営に
おれ達は身を擦り合って互の血を温めた
北天の月はおれ達の夢と未来を見護っていた

おれ達は始め七人
見よ　今おれ達の戦線は九百露里
共産政府の奸計はおれ達を無援の地に陥れた
前面には白軍を
背後には赤軍を
絶え間なき戦闘！
いとまなき彷徨(ほうこう)
卑劣な裏切者は義軍の血祭に！

たとい　おれ達の武器は尽き
たとい　おれ達の義挙は破るるとも
黒い土壌は永遠におれ達の母胎だ
おれ達は生き
おれ達は闘う
マフノとその一党は世界に生きている！
黒い土より生れたその肉と血で
世界にひらめく自由の黒旗は染められよう！



## おれら

おれら　ゴロツキといわれ　ヌスビトといわれ　コツジキといわれ
ヒトデナシといわれ　ムチムノウといわれ　コウガンムチといわれ
ノライヌといわれ　オオカミといわれ　クズといわれ　カスといわれ　ヒトゴロシといわれ　コクゾクといわれ
つまはじきされ
おったてられ
しばりあげられ
つるされ
ひっぱたかれ
けとばされ
ふみにじられ
されど　おれら

悔なし
怖るるなし
天下に恥づるなし

地平線はきわまりなし
輝く天日にむかい
高らかに歌い
朗らかに呼ばわり
ブラヴォを叫び
手を組み
肩を竝べ
足踏み鳴らし
吾等が大道を歩まん



## 出発前

トランクをぶらさげたT
出発の時間までおれ達はギンザをぶらつくことにした
ネオンサインとロボットの流れに溶け合わぬ異邦人の自分を感じな
　がら
だがおれ達は何食わぬ顔で歩いた
煙草を吹かし冗談口を交して歩きさえすればよかった
楽器店の前までくるとTは立止った
――レコードをきいて行こう
――それもいいな
お客のような顔をして二階へあがる
ボックスへはいるとTは慣れた手つきでチャイコフスキーをかける

Tはひとり発って行く
お互い今度いつ会えるかは知らない
だがおれはTの大きな肩と鋼鉄の心臓を信じている
決意はつねに朗らかな微笑につつまれてあれ
Tは笑って去る
おれは笑って見送る



## 褸襤の旗

—或は、無神論者の Elegy—

冷たい夜霧に濡れてお前は立っている。
永劫の、回転する、時のまたたきのなかで、
遠く、雲間を流れる月の行衛を追うてお前は立っている。
家をすて肉身をすてたお前の冒険の日と
しらじらしく消えて行った昼の夢と
途方もない放心の底でうづいている、お前の悔恨。
年輪のごとく、一つの過失は第二第三の過失を生んだ。
狂った羅針盤と、
ねぢ曲った舵機と、
お前の航海と、お前の変貌。
お前の夢みたささやかな天国の設計を、

おれは端から端からと打ちこわして行った。
抑えようとすれば、もがき、はねあがり、
暴風を呼んできおいたつおれの心臓の羽ばたきは
お前の可憐な心の扉を破り、
お前の胸のあけぼのの星をかき散らした。
そうして
破れた夢の復讐は、隕石のようにおれの胸に落ちた。
お前はおれの燃えあがる夢に風をそそぎ、油をそそぎ、
おれはおれで
日毎に冷えてゆくお前の心臓をかきたて、かきまわした。
共生への熱望が十文字に切り結び、
ヴェールをかなぐりすてた雄性と雌性とが反撥した。
おれの野蛮な拳はお前の頬を打ち、
お前は唖の冷情でおれを苛らだたした。
ああ、そして、



争いの果の
どんらんな接吻と、狂暴な抱擁と——

そこには、おれらとおれらの同僚の歴史が息づいていた。
わんわん蚊のわくドブ川や
蛍や
南京虫や
煤煙によごれた太陽や
トラックがゆさぶってゆく地盤や
雨もりが世界地図を描いている壁や
朽ちた廂や、物干台や
破れ障子をはためかして風が叫び、
桜の花が散る頃になって大雪が降り、
霰が走り、
落雷や、洪水や、地震や、

季節は軌道を逸して錯乱した。
そして、おれらは
その蒸し暑い、また凍えた部屋で
饑餓の底唸りをきき、
世界のあっちこっちで殷々とどろく砲声をきいた。
狙い撃ちされた同僚や、
吸盤のある闇に吸いこまれて行って再び帰らない同僚や。
おれは幾度か起ちあがり、つまずき、
砲声の絶えた戦場で
おれはまた空しく、半分冷えたお前のからだを抱いていた。

おお、今こそ
嘲え、罵れ、おれの生恥を。
おれの厚顔、
おれの欝血、



おれの賤劣無頼に石を投げろ。

砲声の絶えた不幸な戦場で、おれは聴いた。
押しつぶされた胸から、
大地の破れ目から、
こんこんと溢れ出る声のない血の歌を。
台風よりも荒々しい夜明けの寂寥の歌を。
止まる時を知らぬ天と地の回転の歌を。
老いさらばえた神。
酔っぱらいの夜叉。
歴史の滓の堆積よ。
過失の年輪よ。
開闢以来の悪業を断滅する、さんぜんたる血まみれの吾等が襤褸の
旗よ。

ああ、いま。
この冷たい夜の野っ原で、
流れる月の行衛を追うて立っているお前と、
遠い夜明けの潮騒(しおさい)をきいているおれと、
回転し、回転し、回転するもの——



## 歴　史

上村実は死んだ。
世俗が彼の首を絞めた。

吾等の戦列は洪水のあとの河原の棒杭のように寂しかった。そして
君は、吹き荒ぶ寒風のなかを外套なしで黙々と歩き、明るく熱
く、燃えあがるために恋をした。

だが、明日のメシを誰が保証する。何時暗い所へもって行かれるか
知れない男には頼れないのが女の常識だ。

戦う男と、頼りを求める女。
男の情熱の高まるのに比例して女は冷えていった。「常識」が女の

言葉を掌(てのひら)のようにひるがえさせた。

ギリギリ結着まで突きつめ突きつめずには済まぬ、凝結した男の眼。世界のあっちこっちで飢餓と行詰まりと不安が底鳴りを起していた。

十字路！

退くことも立ち止ることも出来ぬ、方向のない方向。「悔なく生きる」ための、無への突進！

批判はある。だが「死ねば死にきり」だ。歴史はどんどん流れる。すさまじい渦流のなかの、音のないたった一つの水泡をもみ消して。

上村実は死んだ。

世俗の縄が彼の首を絞めた。

上村実遺稿集　『土塊』序詩



## 夜の機関車

建てこんだ倉庫
鉄塔
シグナル
給水タンク
がらんとした貨物置場
置き忘れられたように動かない
貨車のつらなり
それらがひっそりと鳴りをしずめている
真夜中の構内で
機関車の巨きな図体がひとり
冷たく光るレールの上を往ったり戻ったりしている
突如　荒々しく

ばッばッと火焔色の煙を噴きあげ
けだものの身もだえでレールを引きずり
やけに汽笛を鳴らしたり
ガターンと貨車に体当りを食わしたり
なかなか腹の虫がおさまらんとみえる